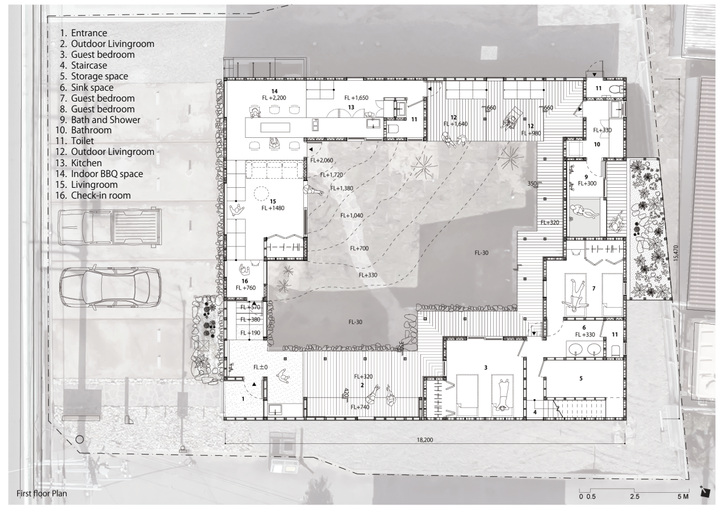






あわじ島のドッグヴィラ
Necklace Villa

木のすまい建築賞 2025
ARCHITECTURE AWARD

犬とひとが一緒にゆっくりと過ごすための貸別荘の計画。
人間と犬の両方が快適で自由に共存でき、この場所の豊かさや土地の持つエネルギーを活かした、この場所ならではの体験を提供することが求めれた。
淡路島はいま過渡期にあり、観光主導の急速な開発が進んでいる。計画地である北部エリアは特にテーマパークのような施設が次々と建設され、計画地の前の海沿いの風景も、地域のコンテクストを無視した商業施設の挿入によって、いつ変化してもおかしくない状況であった。
このような開発事業は経済循環をもたらす一方で、島のアイデンティティや環境的な豊かさを脅かすこともある。ここでの建築は、その両者の仲介として機能し、時代の変化を穏やかに受け入れながら、地域の特色をさりげなく維持したいと思った。

周辺建物の輪郭をトレースするよう変化した各部屋のボリュームが、ネックレスのように繋がりながら中庭（ドッグラン）を囲っている。建築が厚みのある半透明な境界として機能することで、中庭からはこの場所を特徴づけるいくつかのシーン（星空や夕陽、桜並木や鉄塔など）だけが見え、近隣からの視線や自動車の騒音は遮ぎられる。
外観の色は、地域に点在する瓦の釉薬、杉板のベンガラ塗装、倉庫や駐輪場のガルバリウム鋼板といった要素を参照しながら、赤褐色のトーンで統一し、地域の風景にそっと溶け込ませている。

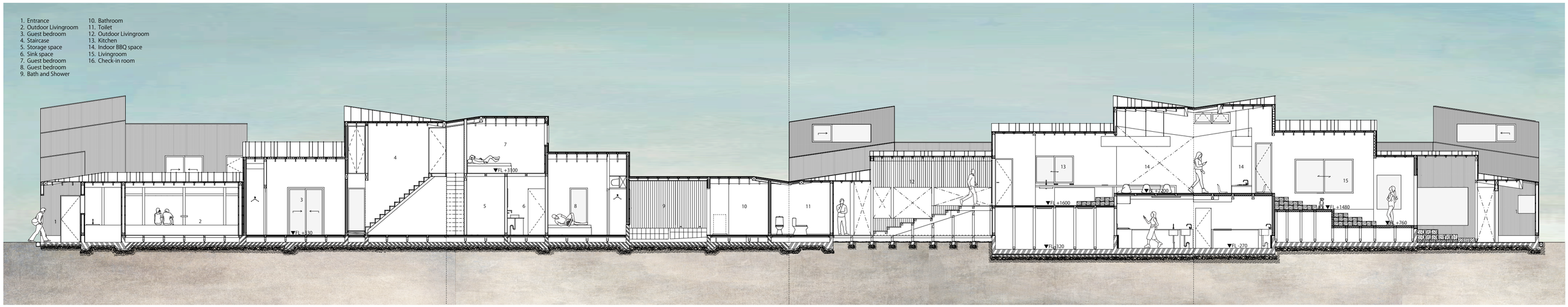
前面道路から距離を取りながら海方向への視線の抜けを作るため、また犬と人が壁を使わずに領域を分けながら共存するために、内部は緩やかな丘の上のようなスキップフロアとなっている。人と犬のアイレベルの違いに着目し、「人にとっては段差でも犬にとっては壁である」といったことを展開し、床レベルによって人の回遊性を促進し、犬の行動範囲を定義した。最も高い床レベルに立つと人からは海が良く見え、犬からは自動車の存在が消える。高窓は山側の公園の緑と空を取り込み、中庭側の引戸は開放され、窓際に腰掛けることで縁側のように機能する。すべて犬と人間の両方の視点からの視線シミュレーションに基づいて調整した。

また、中庭には発生残土を利用した緩やかな丘を盛り、内外を通した回遊動線を形成している。
中庭を巡る回廊には、2つのテラスが挿入されており、北向きのテラスでは日中でも日陰から明るく穏やかな中庭や遠景を眺めることができ、南向きの段々テラスでは食後や入浴後に星空を見上げることができる。

対位法という複数の独立した旋律を同時に組み合わせて楽曲を構築する作曲技法がある。
ここでは、無秩序な観光開発の波に対し、島の風土（地形、気候、生活様式など）を重ね合わせ、それぞれが独立した存在でありながら、全体として響きをなすような建築を目指した。
急速に変わりゆく時代に対しても、海や山、風や光や星空といった変わらないものに対しても、それぞれの距離感で繋がっているという感覚。時代の流れの中で、時間や自然のわずかな揺らぎを感じ、地域の豊かさと現代性を同時に再発見する空間として機能することを期待した。

中庭側の外壁はすべて兵庫県産材を使用している

1. Entrance
2. Outdoor Livingroom
3. Guest bedroom
4. Staircase
5. Storage space
6. Sink space
7. Guest bedroom
8. Guest bedroom
9. Bath and Shower
10. Bathroom
11. Toilet
12. Outdoor Livingroom
13. Kitchen
14. Indoor BBQ space
15. Livingroom
16. Check-in room



Unfolded circulation section

0 0.5 2.5 5 M